

漱石と英文学

『虞美人草』と『三四郎』の場合

海老池 俊治

明治四十年に朝日新聞社に入社した漱石は、そのとき、はっきり職業的作家として立つ決意をかためた。いいかえれば、英文学研究の使命を放棄した。したがって、それ以後、彼の作風が大きく変化したことは当然である。

結果からいえば、その彼の決意と作風の変化は豊かに結実して、わが国近代文学の発展に資したが、その代り、大きな——恐らく比類のない可能性を持っていた優れた英文学者を、われわれは失ったのである。が、いま、完成しなかった英文学者漱石の像をあれこれ臆測したり、そうして成立した作家漱石の業績が果たしてそのような犠牲に価したかどうかと勘考したりすることは、もとより空しい業であろう。しかしわが国の英文学研究者は、この偉大な先達の転身の実情を確かめる努力を払って然るべきではあるまいか。そこから、わが国における英文学研究の意義とともに、広く文学の研究と創作のかかわり合いについて、示唆がえられるに相違ないからである。そして、その「転身の実情」にたいする英文学研究者の関心は、当然、具体的な漱石文学と英文学の関係でなければなるまい。

転身前のディレタント作家漱石の作品に、英文学の影響が大きかったであろうことは、常識的に、誰にでも推察できる。たとえば、その直前に発表された『草枕』はいかにも東洋ふうの装いをこらしているが、実は、英文

学的な意想に満ちている。そして、そういう意想を取り上げる漱石は、のびのびと人を食った態度を示している。ことに George Meredith の観念と技法の借用ないし利用は、みごとな手際だといってよいであろう。²⁾

漱石は明治四十年四月に朝日新聞社に入社して、同年六月二十三日から「朝日新聞」に『虞美人草』を掲載しはじめたのであるが、並々ならぬ覚悟と抱負をもってこの作品を構想し執筆したに相違ない。が、その創作の基礎がここで一転して、異質のものになる、などというはずはなかった。彼は依然として Meredith を小説作法の拠りどころにしていたのである。いや、むしろ、それ以前よりものなおいっそう意識的に Meredith に密着したらしい。

森田草平の『続夏目漱石』第六章、五、
(ホ)に、こんなことが書いてある——

当時世間でも、先生はメレディスに私淑してゐられるのだ、『虞美人草』はメレディスの手法を模したものだのと、いろいろな浮説を立てたものだ。そんな事をいはれたら、これが平生の先生なら、「いや、そんな事はないよ」と頭から否定されさうなものだが、私の知る限りでは、別にさういふ事もなかった。

人生の再出発に直面して、緊張していた漱

石は、片々たる「浮説」に取り組む暇がなかったのかもしれないが、実際、それを「否定」するわけにはいかなかったのだと考えられなくもない。

先ず、作品の構想についてであるが、小宮豊隆に宛てた漱石の次のような手紙（明治四十年七月十九日付）がよく知られている――

あいつを仕舞に殺すのが一篇の主意である。うまく殺せなければ助けてやる。然し助かれば猶々藤尾なるものは駄目な人間になる。最後に哲学をつける。此哲学は一つのセオリーである。僕は此セオリーを説明する為めに全篇をかいてゐるのである。

問題はこの小説に「主意」が設定されていることと、「哲学」及び「セオリー」という観念である。漱石の談話「メレディスの計」（明治四十二年五月二十一～二日「国民新聞」）に、Meredith の〈アフォリズム〉を語って、「オスカー・ワイルドの使ふアフォリズムがよくあれに似てゐるのがある。併しオスカー・ワイルドのは哲学では無い、気の利いたウキツのやうなものだ。メレディスのは其が哲学である」とある。まさに、その通りだといわなければならない。で、漱石が『虞美人草』を書きながら、小説は〈哲学〉を、したがって、また〈セオリー〉を持つべきだと考えたのは、要するに、Meredith の特徴からの借用的思考ではないであらうか。

「メレディスの計」のなかで、漱石はなお言葉を続けて、「メレディスは……エクスプリシットリーに、遠慮なく叙事の間に判断をしたり講釈をしたりする。其の判断なり講釈なりには、彼の人間として批評家としてえらい所が現はれてゐる……是等の講釈は動もすると平凡とか陳腐とかに陥り易いものであるが、メレディスには、そんな弊はない。只時としては厭味に陥る事がある。英語で読んで

居るとそれまでも感じないけれども、もし之を日本語に訳して読んで見たらばと思ふ事が屢ある」と語っている。

以上のような漱石の言葉は『虞美人草』の〈哲学〉ばかりでなく、〈アフォリズム〉、美辞麗句の頻発を暗示してはいまいか。

現在東北大学図書館に蔵されている旧漱石蔵書中に、James Oliphant という著者の *Victorian Novelists* という書物がある。⁴⁾ そのなかに、漱石自身の書き込みがあることはすでに知られているが、恐らく未発表と思われる、簡単な、しかし、重要な、次のような個所を見逃すべきではあるまい。

(一). 同書第七章 Meredith 論に、彼の“artistic success”を妨げた二つの傾向として、

He is too frequently possessed by a spirit — the spirit of comedy; and he yields too much to the fascination of a *tour de force*.

とある文章⁶⁾中、“the spirit of comedy”と“*tour de force*”という句に下線を引いて、右欄外に、それぞれ、1, 2 と番号をつけ、その上方に“*bidemerit*”と書き入れがある。

(二). *The Egoist* の“Prelude”の冒頭を引用して、

Comedy is a game played to throw reflections upon social life, and it deals with human nature in the drawing-room of civilized men and women, where we have no dust of the struggling outer world, no mire, no violent crashes, to make the correctness of the representation convincing...

とある個所⁷⁾の最初の左欄外に、“Comedy”と書き入れがある。

Meredith の〈哲学〉が“Comedy”とい

う観念に集約されることと、彼が好んで技法上の“*tour de force*”を発揮したことは——それが欠点にもなりうるという見解も含めて、Oliphant をまつまでもなく、彼の小説、ことに *The Egoist* を一読した人なら、誰でも気づくに相違ない。が、漱石の上のような書き込みは、彼が Meredith の、とくに *The Egoist* の特徴を確認したことを示している。⁸⁾で、それに加えて、*The Egoist* の顕著な観念“ego”を前面に押し出してみると、それらがそっくりそのまま『虞美人草』の骨組みをなしていることは、疑いの余地がないように見える。実際、*The Egoist* を『虞美人草』の粉本と見做して、両者を比較した論文が、⁹⁾一、二に止らず出ている。

とにかく、*The Egoist* の梗概は次のようである——

Sir Willoughby Patterne は退職軍人の娘 Laetitia Dale に思われて、それを喜びながら、Constantia Durham と婚約する。が、Constantia は出奔、他人と結婚してしまふ。Sir Willoughby は従兄の Vernon Whitford といっしょに世界漫遊の旅に出る。

帰来、酒好きの学者の娘 Clara Middleton に求婚して婚約する。が、やがて Clara は、彼の“egoistic”な性格を見抜いて、その婚約から逃れようとする。アイルランド生まれの軍人 De Craye が現われる。Clara は彼と親しくなり、Sir Willoughby が疑惑を抱く。ある風雨の強い日、Clara は Patterne 家を出て停車場へ向かう。ここで、Vernon が彼女を見つける。De Craye が彼女を捕える。が、Clara は De Craye と出奔せず、Patterne 家へ帰る。Sir Willoughby は Clara に Vernon と結婚するなら婚約を取り消すといひ出す。というのは、みすぼらしい、貧しい Vernon とでは問題にならないだろうと見越したからである。が、男の価値を弁別した Clara はその申し出を受け入れ

る。Sir Willoughby はいまや不承不承の Laetitia に執拗にいいよって、辛うじて承諾をえる。

この小説は Meredith の他の作品と同じく、〈喜劇〉である。が、主人公の“ego”の破滅を主題にしているのであるから、むしろ〈悲劇〉的だともいえよう。“Prelude”の末尾に、

Through very love of self himself he slew.

という一行があるが、それは『虞美人草』の女主人公藤尾の自殺(?)と物語の終りにつけられた甲野の手記の〈喜劇〉対〈悲劇〉論を思い起させる。漱石は Sir Willoughby の破滅を、手痛い〈我〉の崩壊——人間の典型的な破滅として感得し、それを〈我の女〉藤尾の〈死〉という形で表現したのではないであらうか。¹⁰⁾

次に、『虞美人草』の文体、とくに〈アフォリズム〉——きわめて修辭的な語法は、もとより、*The Egoist* の用語の、あるいは文体の翻訳ではない。英語と英文学を熟知していた漱石は、横文字の美辭麗句をそのまま縦文字に直すような愚劣な策をとるはずがなかった。が、彼が過剰な文飾に満ちた『虞美人草』を書いたのは、*The Egoist* の「講釈は……時として厭味に陥る事があるが……もし之を日本語に訳して」(あるいは、日本語的語法にいいかえて)「読ませてみたら」と考えたからではないかと推測することは、恣意的にすぎるであらうか。そういう〈講釈〉は Meredith の「短所に違ひないが、其を没して¹¹⁾了へば随つて長所も又無くなる訳」だということを承知していた漱石は、技癢をおさえることができず、そういう両刃の剣のような危険な手法をあえて試みたのではあるまいか。

『虞美人草』のなかに、はっきり Meredith に言及した箇所がある。(十八)に、こんなことが書いてある――

メレダスの小説にこんな話がある。――ある男とある女が喋し合せて、^{ステーション}停車場で落ち合ふ手筈をする。手筈が順に行つて、汽笛がひゅうと鳴れば二人の名誉はそれぎりになる。二人の運命がいざと云ふ間際迄逼つた時女は遂に停車場へ来なかつた。男は待ち老の顔を箱馬車の中に入れて、空しく家へ帰つて来た。あとで聞くと朋友の誰彼が、女を抑留して、わざと約束の期を誤ましたのだと云ふ。

新書版漱石全集の「注解」に、この「メレダスの小説」という句にたいして、「この小説は“The Egoist: a Comedy in Narrative” (1902) をさし、続く記述はその第二十七章 At the Railway Station から第二十八章 The Return までの梗概を示したものとあるが、先に *The Egoist* の梗概を述べたときに記したように、女 Clara が停車場へ行って帰るのであるから、漱石の言及の趣旨とはだいぶ事情が違っている。もし漱石がそういう相違を意識してこのエピソードを書きつけ、その転用の着想を自作に織り込んだのだとするなら、それはそれとして、Mer¹²⁾edith にたいする興味深い反応だといえよう。が、実は、Meredith の他の作品中に、女が停車場へ行く約束を破るエピソードがある¹³⁾のである。

というのは、*Diana of the Crossways*, Chaps. XXV—XXVI のことである。で、*Diana* の筋を簡単に述べれば、次のようである――

アイルランド生まれで才色兼備の Diana Merion は、格別愛してもない Warwick と結婚して、邸 “Crossways” に住んでいた

が、夫に虐待され、また政治家 Lord Danisburgh との仲を疑われて離婚訴訟を起こされる。文筆家になり、若い政治家 Percy Dacier と恋仲になるが、Dacier が教えた政治上の機密を漏らしたことが種になって、二人の関係は破綻する。夫の死後、結局、最初から誠実に彼女を愛していた Thomas Redworth と再婚する。

この小説の第二十五章に、Diana が夫の告訴を恐れ、Dacier のすすめをきいて彼とともに Maritime Alps へ駆け落ちをする約束を取りかわすことが書いてある。が、突然、Redworth が現われて、彼女を友人のところへつれて行く。次章は Dacier が停車場で「待ち老」を食う叙述から始まる――

Dacier waited at the station, a good figure of a sentinel over his luggage and a spy for one among the inpouring passengers...

一頁ほど先に、次のようにある――

But where was she? He looked at his watch, looked at the clock . . . No sign of her...

His luggage had to be removed. He dropped his porter a lordly fee and drove home.

Diana には明らかなモデルがあり、それが社交界の噂話の種になって、難解な Meredith の作品中では珍しく、人気を博したということである。が、勿論、作者はただスキャンダルの押し売りをしたわけではなかった。ここに描かれたものは、フェミニスト¹⁴⁾として彼が捕えた〈新しい女〉の像であった。近代的な〈自我〉の意識に満ちて、ある程度個性の自律を達成しながら、事実上、公的性格を欠いた――政治上の機密を漏らすような〈女〉であった。

良心的な英文学者漱石は、Oliphant の *Victorian Novelists* などイギリス小説史ないしその解説から、Meredith を知ったばかりでなく、直接、丹念に彼の作品を読んでいる。代表作 *The Egoist* はいうまでもなく、*Diana* も、旧蔵書中のテキストにかなり多く書き込みがある。たとえば、“Dialogue round the Subject of a Portrait, with some Indications of the Task for Diana” という表題のついている *Diana*, Chap. XXVIII 中の、Diana たちの会話を記した頁の上欄外に、“Witty Conversation” とある。もっとも、それを論拠に、漱石が Meredith の「機智に富んだ会話」を好んだことをいい立てても、そんなことは先に述べた「メレディスの計」などから容易に推察されるわけであり、目新しい指摘にはならないであろう。が、*Diana*, Chap. XXVIII の会話が注目されている事実が明白な以上、漱石—Meredith の関係を考えるに当って、この作品の会話を、自然、特別な関心の的とせざるをえないのではあるまいか。

たとえば *Diana*, Chap. XXII の Diana と Dacier との会話中、次のような Diana の言葉は——

I am two years younger than you; socially therefore ten in seniority; and I know how this flower of friendship is nourished and may be withered...

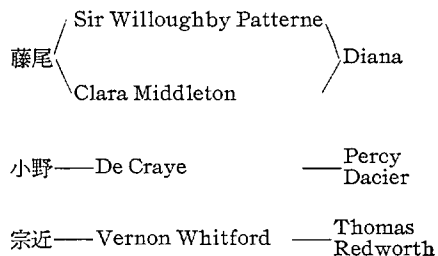
『虞美人草』の藤尾と小野の、ことに(二)の会話(機智に富んだ、些かきざったらしい会話)に挟まれた次のような〈講釈〉と、無関係であろうか。その関係がどのように屈折しているにしても——

女の二十四は男の三十にあたる。理も知らぬ、非も知らぬ、世の中が何故廻転して、何故落ち付くかは無論知らぬ。大いなる古

今の舞台の極まりなく発展するうちに、自己は如何なる地位を占めて、如何なる役割を演じつつあるかは固より知らぬ。只口文は巧者である……

『虞美人草』の女主人公藤尾の人間造型は、Sir Willoughby Patterne のほかに、Sir Willoughby の相手役 Clara と重なり合った Diana から、糸を引いているのではあるまいか、と推測しないわけにいかない。

で、もしその推測が正しいとすれば、さらに、Sir Willoughby (Clara), Diana, 藤尾を中核として、これら三作の人物配置は、大体、次のように図表化することができるだろう。



以上のように、小説家として立つ決意をかためた漱石は、モデル作家 Meredith に準拠することによって、創作の展開と安定化を計ったと思われる。が、その結果は決して成功ではなかった。『虞美人草』が失敗作であったことは、客観的に明白であるが、作者漱石もその業績に満足することができなかった。「生前、この作の噂が出るたびに、いつも苦い顔をして、横を向いてしまはれたものだ」と森田草平が記している¹⁵⁾。

しかし、そのようにして、明らかな失敗を犯した漱石は、そこで大きな収穫をひとつえた。それまで憑かれていた Meredith の呪文を破ることができたのである。

『虞美人草』は〈哲学〉ないし観念の具象化であるが、その困難な課題に *tour de force* を用いて、とにかく解答を与えた漱石は、続いて、人から聞いた話の再説である『坑夫』で、いわば息を抜いたのち、自分の身近かな実生活、あるいは日常生活の現実のうちに、人間の実体を探ろうとした。それが明治四十一年九月一日から「朝日新聞」に掲載された『三四郎』であり、基本的に、『猫』の場合に等しい態度で書かれているわけである。が、『三四郎』は『猫』と違って、小説家であることを自覚した人の手になった作品である。芸術的完成が目指されている。つまり、漱石にとって新しい写実の試みであったのである。

『三四郎』の素材については、くわしい報告が行なわれている¹⁶⁾。が、その一々はいま格別問題ではない。ただ重要なことは、登場人物のほとんど全部が実在の人間にその原型を保持していたらしいことである。

そのうち、美禰子はいささか例外である。すなわち、いわゆる「煤煙事件」の女主人公がひとつの原拠であり、そのことについては、草平自身が報告している¹⁷⁾。また、漱石の談話「文学雑話」(明治四十一年十月一日「早稲田文学」)に、「ゾーデルマンの『アンダイング・バスト』(の)……女が男を追つかけるのだが……私は此の女を評して「無意識な偽善家」——偽善家と訳しては悪いが——と云った事がある。……宅に居た森田白楊が今頻りに小説を書いてゐるので、そんなら僕は例^{アンコンシアス・ヒポクリット}の「無意識なる偽善者」を書いて見ようと、串談半分に云ふと、云云」とあることも、さらに、「断片」中に美禰子の造型についての心覚えらしいものが散見することも、よく知られている。ことに、新書版全集の「注解」者も『三四郎』のテーマ」と指摘している次のような覚え書きが興味深い——

○Woman / art { in creating artificial situations of her own.
in creating unnatural situations of her lover.
× Her motive; purely egoistic love, no sense of justice, professes herself a devout Christian, says everything is God's will and half believes it, mixes up her will and God's will
× Her success.
× Her exposure.
× Her downfall.

Sudermann はドイツの作家であるから、当面の問題から多少外れるわけであるが、漱石が彼の作品を『アンダイング・バスト』という英訳によって知っていたこと、その女主人公を「アンコンシアス・ヒポクリット」¹⁸⁾と英語的観念で受け止めたこと、なお、上記覚え書きの英語的観念、ことに“egoistic love”という規定——といえば、そこから浮かび上がる女性像は上述の Meredith の人間観とどこか重なり合っているのではあるまいかと、自然、推量されるであろう。

そしてこの場合、とくに興味深いことは、そういう〈観念〉が実在の人物(それは¹⁹⁾草平から聞いたものであったにしても、あるいはまた、そのゆえに、現実の人間関係のうちに生きていた人物)と結びついていたと思われることである。

次に、広田先生は第一高等学校教授の岩元禎をモデルにしたものだといわれているが、両者の性癖風貌にどれだけの類似が認められるにもせよ、広田先生は、勿論、基本的に漱石自身であろう。『猫』の苦沙弥先生以上に漱石だといわなければなるまい。当代の習俗・文化を苦沙弥先生以上に鋭く批判する一貫した目の持主であるばかりでなく、はっき

り一個の〈人間〉として造型されているからである。

高等学校で英語を教えているという広田先生は、該博な英文学の知識を持っている。先生の人物像から英文学を切り離すわけにいかない。むしろ思いもかけぬ英文学的映像が、その重要な要素になっている。

はじめ(四)に、先生がなぜ独身なのかという疑問が提出されて、それがこの人物の人間関係を表示するモチーフをなしているが、物語の終り近くになってから(十一)、英文学への言及によって、その解答が与えられる。先生が、昼寐をしていたとき、二十年ほど前に「たつた一遍逢つた女に、突然夢の中で再会した」と、飛拍子もないことを三四郎にいい出す。その女は「[▲]画」で、自分は「詩」である。が、そのために結婚しない「程浪漫的な人間ぢやない。」世のなかにはいろいろ結婚しにくい事情の人がある……

「ハムレットは結婚したく無かつたんだらう。ハムレットは一人しか居ないかも知れないが、あれに似た人は沢山ある」と先生がいう。それは、要するに、妻としての母親にたいする不信の問題なのである。三四郎が「然し先生のは、そんなのぢや無いでせう」というと、「先生はハハハと笑つた」とある。

奇警な発言のようでありながら、実は、それは漱石の *Hamlet* 解釈の重要な一点であつたらしい。²⁰⁾とにかくこのエピソードによって、英文学者広田先生の人物像がかなりみごとに描き出されているといつてよいであろう。

広田先生を描くために、いいかえれば、自己の芸術的客観化を行なうために、漱石は *Hamlet* のような有名な作品ばかりでなく、当時、恐らくほとんど誰も知らなかったと思われる小作家とその作品を、持ち出している。

大学へ入ったばかりのうぶな三四郎が図書館で「毎日本を八九冊宛」借りたが、どんな本を借りても誰かが読んでいる。あるとき

「念の爲め、アフラ・ペーンと云ふ作家の小説を借りて見」ると、「矢張り鉛筆で丁寧にしるしがつけてあつた。此時三四郎はこれは到底遣り切れないと思つた」(三)。ところが、広田先生はその作家を知っていた。『オルノーコ』という小説の梗概を話して聞かせたあとで、その話を「サマーンといふ人が……脚本に仕組んだのが別にある。矢張り同じ名でね。それを一所にしちや不可ない」と注意する(四)。

今日、わが国でも、英文学者のあいだでなら、Aphra Behn (1640—89) の小説 *Oroonoko* (1688) の名と梗概と——なお、Thomas Southerne (1660—1746) によるその脚色の事実もかなりよく知られている。が、『三四郎』が発表された当時、そのような小作家に注目した人はまれであつたに相違ない。イギリス小説史上、近代的な写実の創始者といわれる Defoe (1660?—1731) の先駆としての Behn の位置を確認しようという意図で、広田先生が、持っているのかどうかはとにかく、三四郎が広田先生の博学に驚いた——その知的追求の真率さと迂遠さに度胆を抜かれて、未知の人間性の一面に触れたのは、まさに当然であり、大学で²¹⁾十八世紀英文学を講じ終わつたばかりの漱石が、いま小説家として、半ばふざけながら Behn の名を持ち出したのは、小説作法の計量された手段であつたのである。とにかく、広田先生の映像に大きなアクセントをつけたという意味で、それが効果²²⁾をあげたことはたしかであろう。

広田先生の博学は、もう一人の、Behn と同じ十七世紀の作家によって、強調されている。(十)に、先生が「此間話したハイドリオタフヒア」といって三四郎に本を渡すところがある。そして、その作品から二カ所、日本語訳を掲げてあるが、それらは Sir Thomas Browne (1605—82) の *Hydriotaphia: Urneburiall* (1658), Chap. V からの抜粋で

ある。なお、上に述べた *Hamlet* 論の出る個所の直前に(十一)、三四郎がその本を「ぼつぼつ拾ひ読をする」ところがあるが、その内容は *Hydriotaphia*, Chap. IV に当たる。「中々解らない……此六づかしい書物が、何故解らないながらも、自分の興味を惹くのだらうと思つた。最後に広田先生は畢竟ハイドリオタフヒアだと思つた」とある。

Sir Thomas Browne と *Hydriotaphia* は Aphra Behn と *Oroonoko* よりも有名である。が、今日わが国の専門家のあいだでこの作品がどれだけ読まれているにもせよ、決して普及的な読みものではない。明治四十一年の日本人にとっては、恐らく英文学史上のひとつの名に過ぎなかったであろう。我知らず惹きつけられる不可解な存在(英文学者)広田先生を象徴するものとして、まさに恰好であったと思われる。この言及も綿密に計算された手段であり、かなりみごとな効果をあげているといってもよいであろう。

以上二人のイギリス十七世紀の作家にたいする言及は、基本的に、『猫』のなかのある言及に等しいが、この場合、はっきり意識的に計画された小説作法のメカニズムに組み込まれているのである。

『三四郎』のあとに『それから』、『門』の二作が続いて、三部作をなしたことはよく知られている。あとの二作には、当然、『三四郎』の主題と手法の発展が認められる。で、英文学との関係において最も興味深いことは、『三四郎』以後、英文学にたいする言及が激減することである。といっても、漱石が突如として英文学から影響を受けなくなったわけではなく、彼の英文学的教養はそれ以前と違った形で作品中に生かされたと考えるべきであろう。そしてその考証は、困難な作業ながら、わが国の英文学研究者がいつかは答えなければならぬ課題であろう。

しかしそれは、このノートの当面の問題ではない。ただ、そのような変化が、上に述べた『虞美人草』と『三四郎』にたいする英文学の影響、あるいはそれらの作品における英文学の利用の実情から、予想しうる発展であることだけを、一言するに止めたい。

注

- 1 「私としては、漱石が小説は書かないでも……英国各時代の文学史を書残してゐたなら、もつと有難かつたと思つてゐる」という正宗白鳥の言葉はよく知られている。——『作家論』、『夏目漱石』、四。
- 2 拙稿『『草枕』と英文学』(「一橋論叢」第 37 巻第 5 号) 参照。
- 3 小説中に〈講釈〉をさしはさむことは、それらが〈アフォリズム〉であるにせよ、また、単に常識的な人生の解説であるにせよ、Meredith の独創ではない。十八世紀のイギリス小説の創始者たちから始まって、十九世紀では、たとえば、George Eliot の大きな特徴のひとつである。漱石と Eliot の関係はわれわれにとって重要な問題であろう。
- 4 James Oliphant という名はいまほとんど忘れられているようである。が、1899 年に出版されたこの書物の第七章は、*Cambridge Bibliography of English Literature*, III. 470 に、Meredith 関係の“Essays and Chapters in Books”の一項目として名があがっている。
- 5 新書版全集第 32 巻 121 頁にその摘要が記されている。
- 6 *Victorian Novelists*, pp. 148—9.
- 7 *Ibid.*, p. 158.
- 8 上記の書き込みがいつ行なわれたかは明らかでないが、他の多くの書物にたいする書き込みと同じく(たとえば Jane

Austen の小説 *Emma*, p. xvi に、評言を書き入れたあとに “Jan. 30, 1901” とある。1901 年は明治 34 年に当たり、漱石のイギリス留学中である）、漱石が英文学を〈研究〉していたころのものであろうと想像しても、大きな見当外れではあるまい。

9 たとえば、石丸久『『虞美人草』について』、中野好夫『漱石と英文学』（ともに『比較文学研究』1）、板垣直子『虞美人草』（『漱石文学の背景』）など。

10 上記石丸氏の論文中に、“Prelude” 末尾の句について、それを「かりにいま Through very love of self herself she slew とおきかえるとき、漱石の意図の一つがここに明かに看られ、云云」とある。なお、あとで記すように、Meredith には *The Tragic Comedians* (1880) という象徴的な題名の作品があり、漱石旧蔵書中のこの作品に書き込みがある。

11 「メレディスの計」。

12 『虞美人草』では、女藤尾が停車場へ行くのに、男小野は行かないのである。なお、全集本の〈注解〉に *The Egoist* の年代を 1902 とあるのは誤記である。この作品は 1879 年に出版された。

13 そのような「転用」の可能性について、筆者は小宮豊隆氏の御意見をきいたことがあるが、そのとき氏は言下に、そんなことはなかろう、漱石が作品中にはっきり書いていることはだいたい文字通りである、という意味の返事をされた。

14 前記 *Victorian Novelists*, pp. 188—9 に、次のようにある文章中、*The Tragic Comedians*, *Diana of the Crossways* という題名の下に線が引いてある

Like *The Tragic Comedians*, *Diana of the Crossways* is based upon fact,

but not with anything like the same degree of closeness in regard to the incidents. The heroine is intended to represent the Hon. Mrs. Norton...

After all, however, the biographical interest of the novel is its smallest claim to appreciation...

15 森田草平『夏目漱石』、『漱石研究』、長篇時代。

16 小宮豊隆『漱石寅彦三重吉』、『三四郎』の材料。

17 森田草平『続夏目漱石』、第七章、六。

18 「断片」の一つに、“Unconscious hypocrite” とローマ字書きにしてある。

19 たとえば、*Diana*, Chap. X 中の次のようなきわだった “hypocrite” の観念を参照——

There is perpetually the inducement to act the hypocrite before the hypocrite world, unless a woman submits to be the humbly knitting house-wife, unquestioningly worshipful of her lord; for the world is ever gracious to an hypocrisy that pays homage to the mask of virtue by copying it...

20 『虞美人草』のなかにも、そういう趣旨で *Hamlet* に言及した個所がある。

(十二)に「沙翁は女を評して脆きは汝が名なりと云つた」とあり、甲野を *Hamlet* に比しているが(十七)、彼が糸子に「夫で結構だ。嫁に行くのは勿体ない」と説く口調は、*Ophelia* にたいする有名な *Hamlet* の台詞 “Get thee to a nunnery.” を思い起させる。

21 『文学評論』（「十八世紀英文学」）は明治 38—40 年に講義されたが、同書中に詳細な Defoe 論があることはよく知られている。

22 1948 年に George Woodcock: *The*

Incomparable Aphra という伝記考証が出て以来, Behn にたいする興味はかなり復活したように見える。*Oroonoko* は翻刻があるからという理由でこの小説を除いた紙装の Behn 作品集がアメリカで出版されている。

23 たとえば(十一)の Thomas Nashe (1567—1601) の *The Anatomie of Absurditie* (1589) など。

(旧漱石蔵書の自由な借覧を許され, そのあるものをマイクロビーに取って下さった東北大学図書館とそれを斡旋して下さい下さった東北大学教授村岡勇氏に, ここで厚くお礼申し上げたい。)